

ウィリアム・キャッシュ著『第三の女—「情事の終わり」
を書かせた秘められた激情』について (注1)

*On William Cash, The Third Woman: The Secret Passion
That Inspired The End of the Affair*

山形 和美

YAMAGATA Kazumi

著者のキャッシュは、一九六六年にロンドンで生まれ、ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジで英文学を専攻した。そのときの指導教官の一人に、後で触れることになるあの浩瀚な『小説における不倫』という著作を書いたトニー・タナーがいた。キャッシュはその後『タイムズ紙』のアメリカにおける特派員を務め、『オブザーヴァー』や『タイムズ文藝付録』に批評を書き、『スペクテイター』に定期的に執筆してきた。アメリカでは、彼の作品は『ニュー・リパブリック』や『ロサンジェルス・マガジン』などに発表され、ヨーロッパでは、『ル・モンド』や『イル・モンド』などに載った。彼はラジオやテレビにも呼ばれて広範囲に出演した。著書に『ウィリアムの教育—ハリウッドの通信員の回想録』がある。

この『第三の女』はその副題にもあるように、それとほとんど同時に並行して書かれた『情事の終わり』のグリーンとその情婦キャサリン・ウォールストンの苦痛に満ちた、切ない長い年月に亘る恋い物語りににおける道行き、二人の間のセックス次元の裏切りの行為、執念、文学的復讐などを描く強烈な物語になっていて、実人生と芸術の関係を問題にする。これは、同時に、文学が不倫に負っている文学的創造作用の構造を魅惑的に探求している。

問題の『情事の終わり』は二〇世紀文学の超大作の一つで、魅惑的な作品でもある。グリーンとアメリカの美女キャサリン・ウォールストンの情事がこの小説のきっかけになっている。これには、“To C”という献辞が書かれているが、私が持っているアメリカのバンタム版には“TO CATHERINE with love”とある。一九五一年出版のものである。この版は私が英文科の学生のとときにクラスで使ったものである。これらの献辞が誰に捧げられたものか、当時は教師やグリーン研究者ですら知る由もなかったが、グリーンとキャサリンとの情事が明るみに出て初めて明らかになった。二人の運命的な出会いのあとの愛、苦しみ抜かれた宗教的状況、セックスへの罪意識、絶望感、告解からの逃避、秘められた誓いなどが構成する激情に満ちた物語は、『事件の核心』を含むグリーン以外の傑作の幾編かの背後に潜む源泉でもある。一九四八年にグリーンは、キャサリンとイタリアを旅しながら『第三の男』を書いた。

一九四六年一二月に雪にとじ込められたイースト・アングリア地域を越えてオックスフォードまで飛行した(その飛行機の中でキャサリンの髪の毛が風に吹かれてグリーン頬を撫でた。その瞬間グリーンはキャサリンを恋するようになった)あと、二人はその不義の恋愛を始めるようになった。その時機にはグリーンは『ブライトン・ロック』で世間の喝采を浴びていた作家であった。同時にヴィヴィアンとの結婚は困難を極めていた。一方、キャサリンは百万長者を夫に持ち、彼は労働党のシンパであった。キャサリンはセックスの面で自由奔放な三〇歳の女であり、グリーンとの長い情事の相手であったのに加えて、ケンブリッジ近くのスリプロー農園の、後には壮大なニュートン・ホール的女主人であった。彼らの情事は、グリーンが『燃え尽きた人間』を書くまで(一九六一年)続いたが、この事実はグリーンが一九九一年に亡くなるまで公にはされなかった。

著者キャッシュは、二人の情事の行われたいろいろの場所を新たに訊ねてみたり、グリーンがキャサリンに宛てて書いた千二百通ばかりの手紙や、キャサリン個人の日記、それにイーヴリン・ウォールストン、ノエル・カワード、ハロルド・アクトンダイアナ・クーパー、アン・フレミング、マーゴット・フォンテンの語りの始まりとなり、それに生気を吹き込むのは実際には結婚であることは少なく、それは不倫である」と、タナーは書いている。

さらにキャッシュは続けて言う――鋭い文学批評家として、またイギリス小説の綿密な読み手として、グリーンは小説における不倫と語りは解きがたく結ば、アレキサンダー・コルダなどにグリーンが書いた手紙などを活用している。著者はまたグリーン妻ヴィヴィアン、家族の人たち、グリーン=ウォールストン・サークルの親しい人たち、グリーン的情婦、中でも三十一年間グリーンと連れ添ったイヴォンヌ・クロエッタ(彼女は自分とグリーンの出逢いや関係についての回想録がある―Yvonne Cloetta, *In Search of a Beginning: My Life With Graham Greene, as told to Marie-Françoise Allan*, 2004)などの女たちとインタビューをしたりしている。本書での彼女やグリーン妻ヴィヴィアンとのインタビューは出色である。

一九五〇年代がなぜグリーンのもっとも多作の時期だったかという質問への回答の一部は、キャッシュによれば、文学にとっての不倫の重要性や、性的執着の文学的創造性への関係であるが、こういった主題は、今は亡きトニー・タナーの素晴らしい二巻本『小説における不倫』(一九八六年)以来重大な関心をほとんど受けてこなかった。このタナーは大学時代のキャッシュの指導教授であったが、ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジのフェローであった――このコレッジはウォールストン家と密接な家族関係があった(グリーンは一九六二年にこのコレッジでケンブリッジ名誉博士号を授与されている)。不倫は文学に役に立つか。タナーは、不倫は、フロベールの『ボヴァリー夫人』からトルストイの『アンナ・カレーニナ』にいたる一九世紀の偉大な中産市民階級の小説作品を明確に規定する出来事であるだけでなく、それは小説を語りの無力から救った活力元を提供したのである。不倫は、社会的限界という発想を小

説というジャンルから解き放ったのである。「小説家にとって、死んでいるものと信じる。部屋に戻ったセアラは、彼を生かしてくれるならこの情事の間を一切捨てると、いまだ信ぜざる神に祈って誓う。だがベンドリックスは生き返って部屋に戻ってきた。彼女は一言も説明することなく、彼と別れて部屋を後にする。神に引き寄せられ、同時に人間関係によって引き裂かれるにつれて、セアラは、十分に良く知っていた。『事件の核心』や『情事の終わり』に続いて、不倫の主題は彼の小説の生命力となっている。彼自身の生活に関するかぎり、彼は不倫を文学の再生もしくは救済の一形態と見ていたと、推測しても良いだろう。不倫は新しい語りの出発、彼の人生の次章、次の作品の序章への希望を拓くものであった。

ここで『情事の終わり』の梗概に改めて目を向けてみよう――

『情事の終わり』――恋、憎悪、嫉妬、そして神による拉致

二人は一九四八年の初め頃、映画を観て、レストラン・ルールズで玉ねぎをふんだんに添えたステーキを食べたあと、恋人になった。そこを出た二人はメイドン・レインまで来て或る家の入口の横でキスをした。二人はその夜交わった……。

この二人とはグレアム・グリーンと後に熱烈な恋の相手になるキャサリン・ウォールストンである。グリーンはキャサリンを「荒らしく、狂ったように、どうしようもなく」愛するようになる――「君は男が手に入れたいと夢にまで見る最高の女だ。君は僕が知っているどんな女のなかで最も優秀な頭脳を持っていてもいい」と、グリーンは手紙に書いた。まさにこのように、グリーンの小説『情事の終わり』 (*The End of the Affair*) も映画も始まるのである。

何の情熱も持たない高級官僚を夫に持つセアラは作家ベンドリックスとの不倫の道を通る。それは、最初は単純な情欲、それから初めて知る純粋な人間味に溢れた愛、そして最後に神の愛に絡め取られゆく一種の道行きになる。ある日恋人の部屋で情事に耽っている最中ドイツ軍の爆撃が始まり、地下階の様子を見に行くために部屋を出ていった恋人を探しに、セアラは部屋を出る。すると瓦礫に埋まって倒れている彼を目にし、彼がセアラは言いようのない苦しみと孤独に苛まれる。ベンドリックスは、五年間の熱愛の関係の中で嫉妬と不安に苦しむ。今まで幾度か情事に身を任せたことはあっても誰からも本当に愛されたことのない彼は、セアラの十全な愛を信じることができない。結ばれていながらも、そのために二人は不幸になる。あの爆撃の日からぶつつり音信が途絶えた。セアラには新しい恋人、つまり〈第三の男〉ができたと思う彼は、セアラの日記を見てその〈愛人〉が実は〈神〉だったことを知る。彼女の日記には、いまだにベンドリックスを愛している、〈月並みの、爛れた人間的な愛が欲しい〉、だが自分は同時に神を信じるようになったとも書かれている。それを知ったベンドリックスはセアラに会って、離婚して自分と結婚してくれと懇願するが、セアラからの連絡を待ちこがれて

いたところ、その後間もなく「セアラは病気で死んだ」という電話がセアラの夫からかかってくる。セアラは男への愛と神への愛の間にいわば引き裂かれて死んでいったかのようである。

三〇年代に二〇世紀の第二世代作家として書き始めたグリーンが八十六歳の一生を閉じてはや二〇年の歳月が流れた。死の直前まで旺盛に書き続けてきた作家としての彼の生涯は六十五年にも及んだ。彼は「私はノーベル文学賞よりも偉大な賞を期待している―それは〈死〉という賞だ」と言ったことがある。彼より少し遅れて出たノーベル文学賞受賞作家のあのウィリアム・ゴールディングは「グリーン文学は孤高を保っていた。彼の小説のうちもっとも出来の良いものは、完成された文学として人々の記憶に残るだろう。彼は二十世紀の人間の意識と不安とを究極的に書き留めた人として読み継がれていき、忘れられることはないだろう」と、追悼文で述べた。

グリーン文学はみな、多かれ少なかれ暴力、世界政治、スパイ、ラシオシネーション、セックス、宗教等々、話題に事欠かない。しかも彼は〈大衆文学〉作家ではないのだ。彼の小説のほとんどが映画化されてきた理由が、ここらあたりにあると思われる。

死後四年経った頃からグリーン生前の秘話に関する記事が多く出始め、浩瀚な伝記がそれらと前後して四冊も書かれた。そのうちマイクル・シェルデンのものが最高に面白い（二巻本の拙訳あり、早川書房）。

グリーンは妻ヴィヴィアンとの間に二児をもうけていたが、間もなく別居し、独身の女性ドロシー・グローヴァーと同棲した。そのグローヴァーとの付き合いを続けながら、今度はキャサリンを永遠の女性として恋い求めるようになった。アメリカ生まれのキャサリンはケンブリッジシャーの大地主（「イギリスで最も金持ちの一人」）のハリー・ウォールストンと一八歳の時に結婚した。グリーンはキャサリンに会って、その美貌と聡明さと富による自由とに惹かれるのだが、その長い苦しい関係のなかで、同じカトリックの彼女はグリーン的重要な作品の幾つかに濃い影を投げかけている。とくに『情事の終わり』（一九五一年）は、二人の関係がそのまま素材になっていることはすでに見た通りである。グリーンはこれをキャサリン自身に捧げた。

この作品はデボラ・カーとバン・ジョンソンを配して一九五五年に映画化され、一世を風靡した。私のようなグリーン作品を何十年となく繰り返し読み、分らないところはグリーン自身に問い合わせてきた読者にとっては、映画を観ると原作と比較する癖がついてしまう。特にこの作品は語りの構造が極めて複雑で、そのために〈恋と憎しみ〉の状況が異様なほどの圧力をため込むことになった。だが、映画ではそれを望むことにはある意味では場違いである。

この度の二度目の映画もむろんよくできていると思い、感動しながら見たが、原作と大いに異なるところは多々あることにも気づいた。そのうち重要な意味を孕むものに、情事の最中にドイツ軍の爆撃が始まったので地下階に降りていったベンドリックスは扉の下敷きになって腕

だけを出して死んでいる様子であったのが、映画では彼は地下階への階段で倒れている。また、教会まで追っていったベンドリックにセアラは「今は帰って。あとで電話する」と言ったのが二人の最後になるのに、映画ではヘンリーの求めに応じて、ベンドリックスは二人で重病のセアラの死を看取ることになっている。セアラに恋人たちのベッド・シーンが赤裸々にスクリーンに映し出されている。観客はこれらのシーンをじっくり観て演出の巧みさを感じ取ってほしい。

また前回の映画ではセアラ役と夫のヘンリー役のデボラ・カーとピーター・クッシングは当たり役だったと思うが、セアラの恋人ベンドリックスを演じたバン・ジョンソンは役はずれの感じがした（グリーン自身もそう思っていたらしい）。この度の映画では、ベンドリックス役のラーフ・ファインズは最高の当たり役である。しかしヘンリー役の大柄のステイヴン・リーは精神的にも、肉体的にも力があるように見えすぎて、グリーンが意図していたと思われる内向的性格や言動とちぐはぐな感じを、私は持った。これも監督の意図的な役作りであろう。問題はセアラ役のジュリアン・ムーアだが、私たちはデボラ・カーを忘れたほうがよい。ムーアはデボラ・カーほどに高貴で美人とは見えない。が、ムーアは過去も未来も閉め出して〈現在〉だけに生きながら〈爛れた不倫の恋〉に没頭できる風貌と肉体を提示できたと、私は思う。

この映画が取り込んでいる空間はロンドンをかなり知っている観客には、きわめて興味あるものになっている。ベンドリックの住む寝室兼書斎の一部屋の安アパートとセアラ夫妻の住む高級マンションはテムズ河南岸にあるクラップム・コモン（公園）をはさんで南側と北側にそれぞれある（セアラのマンションは一四番地）。ベンドリックスとセアラが初めて交わるホテルはアーバンクル通りにある。その後二人がよく使ったのは、やはり同じ通りのブリストルという安宿である。また二人が入る喫茶店はリージェント・ストリートのキャフェ・ロワイヤルだが、ここは今世紀初期には多くの芸術家や作家たちがよく出入りしたところである。最後の逢瀬になった日にそこを出て彼らはメイドン・レインにある由緒あるレストランのルールズに行く。セアラが自分をまだ愛していることを彼女の日記を読んで知ったベンドリックスは彼女に電話をかけて、今すぐそちらに行くと言うと、病気で寝ていた彼女は取るものもとりあえず家を出て逃げるが、ベンドリックスに追っかけられて彼女が入り込む教会は、本文では「パーク・ロードの角にある教会」と書かれている。パーク・ロードというのはクラップム・コモンから北上するクィーンズ・タウン・ロードと一・五キロくらいのところで交わるバターシー・パーク・ロードだと思われる。そうだとすれば、その教会は〈カルメル山聖母・聖ヨセフ教会〉(The Church of Our Lady of Mt. Carmel & St. Joseph)というカトリック教会である。

以下、グリーンとキャサリンの間の情事の神髄をマイクル・シェルデン（拙訳『グレアム・グリーン伝—内なる人間』二巻本によりそって簡単に見ていこう——

一九四六年にヴィヴィアンは、カトリック教会の信者になる計画を立てているある美人の若

い女性から連絡を受けた。自分が教会に受け入れられる大事な日にグレアム・グリーン氏が自分の代父になってくれることはできるか、とその女性は訊ねてきた。自分はグリーン作品をひじょうに良いものと思っているので、教会に入るのに手助けをしてくれれば、それによって彼の真価を確かめたいとも思うと、彼女は言った。ヴィヴィアンはグレアムに相談して丁寧な返事をし、ええ、作家は喜んであなたの申し出を受けるそうです、儀式のときには花を贈ると申ししておりますと、告げた。ヴィヴィアンは式のとくに多忙な夫に替わって進んで出席した。このような申し出は有名税であって、このたびのことも、その女性がそれほど魅力的でなく、執拗でなく、また金持ちでなかったならば、簡単に忘れられたかもしれない。グリーンがあとでヴィヴィアンから聞いて知ったことだが、美しい、新しい改宗者は受洗記念の朝食を自分の自家用機に置き忘れたそうだ。うまくはめ込まれた彼は、オックスフォードの家に訪ねてくるように招いた。彼女が着いたとき、一目見るだけで、来たる長い年月のあいだ消え去ることのない情熱を吹き込むに十分な女性であった。これはグリーン生涯でもっと重要な情事の始まりとなった。

代父を訪ねたときは、キャサリン・ウォールストンは三十歳であった。彼女はイギリスでもっとも金持ちの男の一人と結婚していて、五人の子ども（数年後に六人目ができることになる）の母親であった。夫のヘンリー・ウォールストンは労働党の有名な支持者であったけれども、彼は贅沢を捨てることが良いことだとは信じていなかった。彼とキャサリンはコンヴァーティブルの黄色いロールス・ロイスを、ケンブリッジシャー州に優雅なカントリー・ハウス（ニュートン・ホール）を、近くのスリプローという村に農園を、セント・ジェームズ通りに屋敷を、アイルランドの海岸沖の島にコテージを、ダブリンにアパートを、カリブ海のセント・ルシア島にバナナ農園を、それぞれ持っていた。スリプローの家族農場は数千エーカーの土地があって、一九四〇年代には百人の労働者を雇っていた。ニュートン・ホールの従業員には四人の庭師、運転士、執事、従僕、料理人、料理人助手などが一人ずつ、それにいろいろのメイドがいた。ウォールストン家は多くの友人をしばしば、また豪勢に招いてその富を分かち合った。この歓待ぶりについてのイーヴリン・ウォーの言葉は絶妙をきわめている。あるタベウォールストン家と食事をとりたいと申し出ると、キャサリンが電報で「その晩は一五〇人の人が夕食にまいますが、いいですか？」と応えた。ウォーの返答は簡潔だった――「誰？ どのように？ 何故？ とくに、どのように？」

自立した生き方のために、彼女には多くの女友だちができなかった。逆に、とくに、女友だちの夫たちにあまりにも多くの関心を示す癖が彼女にはあった。しかし彼女は性的には奔放で、他の人たちがなぜそうであってはいけぬのか理解できなかった。彼女は床の上や野原や、禁じられた場所でセックスするのを幸福と思っていた。グリーンと関係を持っている間に、「イタリヤのあらゆる高い祭壇の後ろで不貞を働く」と友人の一人が後に言ったユニークな行為を

グリーンとした。いつもセックスをする気持になっていた彼女は、抽出いっぱいにもいろいろのサイズのコンドームを入れていた。あるときなど、その抽出の中身をハンティントン伯爵夫人に見せたところ、それを見せられた伯爵夫人の唯一の感想の言葉は賛嘆の穏やかな表現であった。「まあ、なんと便利なこと」と、ハンティントン夫人は述べた。

この性的な遍歴の刺激的な行路のどこかで、キャサリンはカトリズムが格別に強力な刺激剤であることを発見した。彼女は僧侶が好きになり始め、僧侶を誘惑するのを楽しみにした。彼女を寄せつけない僧侶たちもいたが、完全に屈服する僧侶たちもいた。長い年月のあいだ、彼女はドナル・オサリヴァン神父と情事を続けた。この神父は最後にはアイルランド芸術委員会の委員長になった人である。オサリヴァンとキャサリンはダブリンの彼女のアパートにしばしば一緒に泊まっていたが、後年彼らは好んでヴェネチアで毎年休日を過ごした。彼女のお気に入りのもう一人の僧侶は、ドミニコ派の神学者で〈理論道徳學〉と呼ばれる学問の教授であるトマス・ギルビー神父であった。彼は、ツイードを着、パイプをふかし、人生のかなりのあいだパブで飲みながら過ごしてきた元気旺盛な人物であった。キャサリンの子どもの中の一人のビル・ウォールストンはこの神父にひじょうに懐いていた。彼は神父の気さくなウィットや暖かい物腰が気に入っていた。数年間ギルビー神父はほとんどこの家族の一員のように思えた。ハリーが留守をしているときなど、彼がテーブルの頭に座ったり、また大小を問わず問題が起こすといつでも彼の助言が求められた。ハリーは彼を友人とみなし、満足して彼の判断を重視した。ビル・ウォールストンによれば、「僕の父とグレアムを例外として、ギルビー神父は僕の母の人生においてもっとも重要な人物でした。」

二人は一九四七年の初め頃、映画を観て、コヴェント・ガーデンのルールのレストランでステーキのディナーをすませたあと、恋人になった。ルールの店を出てから、二人はメイドン・レインのところで足を止め、ある家の入り口のそばでキスを交わした。二人はその夜交わり、その後セックスをする暗号を用いて合図することにした。それはステーキのディナーの添え物、つまりタマネギを思い起こさせる暗号であった。数か月経つと、彼は彼女と定期的に会うことになって、たくさんのタマネギを喜んで食べる仲になっていた。彼は彼女の屋敷を足繁く訪れる客になり、最初のうちはハリーと親しい間柄になった。ハリーは、グリーンが騒ぎを醸さないかぎりには、彼の存在を歓迎した。しかしグリーンには、自分の激情を押さえておくことがますます難しくなっていた。週末に家に呼ばれるお客としてなら、彼は他のお客たちに対しては礼儀正しく振る舞い続ける努力もしたが、キャサリンと二人になれるようなときをいつもいらいらしながら待っていた。彼は数日間彼女を独り占めにできるたまさかの機会を求めて生活し始めた。二人はロンドンに、アイルランドにあるキャサリンのコテージに、ヨーロッパ大陸に、あるいは（後年には）東南アジアのような遠い場所などに逃げ出したりした。

彼にとって、この情事には神秘的な側面があった。彼は彼女を、自分の生涯の連れ合いとなる運命の女性、自分にとって全てである女性として見ていた。屈託のないその態度をもって、彼女は彼の途方もない空想を喜んで受け入れ、彼の暗黒の恐怖に喜んで耳を傾けてくれるのだった。ニュートン・ホールがハーストンから一マイル半のところでしかないという事実が、美しいキャサリンを自分の少年時代の永遠のシンボル——魔法の池や恐れられた植木鉢小屋——と結びつけることを容易にした。自分が十二歳のとき（彼の生涯で学校時代の悲惨が始まったとき）に彼女が生まれたということも、意味があった。彼は彼女を、時間が自分のために取っておいてくれた友輩として、ある日自分を探し出してくれ、また彼の孤独の重荷を軽くしてくれる精神的な妹（事実そうしてくれたように）として見ることができた。彼の心酔ぶりは、彼女の名前に特別の意味合いを付加するように彼を駆り立てた。自分が読んでいるどんな本にでも〈キャサリン〉という名前を見つれたり、一枚の紙に彼女の名前を書いて塗りつぶしたり、また彼女を〈キャサリン・グリーン〉と空想したりすることに興奮を感じた。

彼の期待していることを満足させるためにできることは、彼女は何でもした。二人は一緒に飲み、夜更けまで冗談を言い、秘密を分かち合い、文学や芸術について語ったり、また売春宿に一緒に行ったりさえした。

キャサリンに対するグリーンへの愛着の強烈さには、始まって数か月のうちに情事を終わらせる気配があった。彼女が自分と十分な時間を過ごさないとグリーンはたえず愚痴っていたが、彼女と一緒にいるときは、口喧嘩を始めるか、さもなければ深く落ち込んで黙りを決め込むかのどちらかがしばしばあった。「グレアムひじょうに落ち込む」というのは、彼らの情事の初期の頃のキャサリンの日記に出てくる典型的な書き込みである。一九四九年の夏に彼女は、「グレアムいつになく憂鬱で落ち込んでいる——グレアムに対してすらも」と書いている。この気分は広がる可能性があることも、キャサリンは発見している。手紙の一つで彼女は「ほとんどグリーン的な落ち込み」に悩むことを語っている。彼と一緒にいようとどんなに努めても、けっして十分ではなかった。グリーンと暗い激情のいつ果てるともされない日々を体験できるときに、彼女がなぜ自分の家族や夫や、あるいは他の人たちを必要とするかをグリーンは理解できなかった。

二人の関係はつねに極限の関係であった。彼らはしばらくのあいだはこの上なく歓喜に満ちて幸福でありえたが、そのあとキャサリンが出ていく必要があるとグリーンは絶望するか、さもなければ、彼女を失うことを気遣って喧嘩を始めるのだった。あるときは、彼は彼女を褒めそやし、二人とも結婚の無効処分を得て結婚し、それから島を買い、世間から隠れるんだといったように、二人の未来のための途方もない計画を立てる。つぎの瞬間になると、彼はこの情事を止めるとはどく脅し、自分たちは互いを幸福にできないのだと言う。キャサリンはこうい

った嵐を乗り切るのが驚くほどうまくいった。彼女は本当にグリーンが好きであって、彼のなかの最善の部分を見ようと努めた。しかし彼女は自分のすべてを彼に、あるいはいかなる男にも与えることはできなかった。彼女は二人の困難に苦悩し、彼の輻輳した人格を理解しようと努めた。彼の硬い外面が脆弱な自我を保護していることは、容易に見抜かれた。ボンテへの手紙で、グリーンは「誠に、誠にシャイで、誰かが彼を欲することがあるなんて考えることもできないんです」とキャサリンは書いている。

キャッシュはほぼこの線に従って本書の作業を進めていることが了解できる。

そうすると、キャッシュの本書に寄せる意図が問題になるが、彼は自分で自著の本質について述べている。その箇所を引いてみよう――

この私の著作は、『情事の終わり』の「全背景」を提供することを目的とする捜査のような作業である。だが、戦時のベンドリックスとセアラの不倫の情事という振れたドラマを、グリーンに苦痛に苛まれたウォールストンと彼女の夫、つまり《夫婦と片方の愛人との》`三角関係に合わせ鏡を掲げたものとして読むことがいかに魅惑的なことであろうとも、セアラがキャサリンであり、ベンドリックスがグリーンであるとみなすことは、グリーンに芸術を無邪気に単純化しすぎることになる。グリーンはセアラをキャサリンだけではなく、かなりの範囲の女性に関する自分の経験の多くを移し替える創造的な手段として作り出したのだ。

さらにキャッシュはこうも述べている――

この本はまた必然的に、「作品の創造行為」自体に文学的に採りを入れるものである。私は、グリーンのような強力な創造的人物がなぜに、「危険な女性」（グリーンの場合キャサリンを「危険な善良さ」の具現化として見ていた）に引き付けられると自分のことを見てきたかを調べてみたい。そしてこの逆も真である。キャサリンは逆説的で挑発的な性質の女であって、その本質的な曖昧さが力強く神秘的な性的推進力としてグリーンには思われたのである。その神話的な牽引力はホメロスにまでさかのぼり、その文学的タイプはデリラからキーツの『つれなきたおやめ』（キャサリン・ウォールストンはマルカム・マガーレッジによって、「たおやめ」だが「つれない」と言い表された）まで見られる。キャサリンはグリーンのもっとも素晴らしい作品のもっとも苦悩に満ち、かつ喜びにあふれた見通しの光景の大部分を貫流する暗い川であった。暗い、ねじれた、威圧的な――時にはサド=マゾ的な性的な力を持つ川であって、私はその岸辺にさかのぼって「グリーンランド」の真っ暗闇の核にある創造力の源流を探しに行くのである。（因みに、「グリーンランド」という句は、グリーンがその典

型的な逆転的な癖で、はっきりと嫌っているものである。)

すでに見たように、キャッシュは不倫と文学創造の関係結びつきを必然的なものと見ていることが、本書の主要なモチーフとなっている。そのことは次のキャッシュの文章に如実に見て取れる——

鋭い文学批評家として、またイギリス小説の綿密な読者として、グリーンは小説における不倫と語りは解きがたく結ばれていることを、十分によく知っていた。『事件の核心』や『情事の終わり』から続いて、不倫の主題は彼の小説の生命力となっている。彼自身の生活に関するかぎり、彼は不倫を文学の再生もしくは救済の一形態と見ていたと、推測しても良いだろう。不倫は新しい語りの出発、彼の人生の次章、次の作品の始まりへの希望を拓くものであった

これと関連づけて、キャッシュの次の文章もよく吟味して読むべきだろう——

一九五〇年代がなぜグリーンのもっとも多作の時期だったかという質問への回答の一部は、文学にとっての不倫の重要性や、性的執着の文学的創造性への関係であるが、こういった主題は今では亡きトニー・タナーの素晴らしい二巻本『小説における不倫』（一九八六年）以来重大な関心をほとんど受けてこなかった。このタナーは大学時代の私の指導教授であったが、ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジのフェローであった——このコレッジはウォールストン家と密接な家族関係があった（グリーンは一九六二年にこのコレッジでケンブリッジ名誉博士号を授与されている）。不倫は文学に役に立つか。タナーは、不倫は、フロベールの『ボヴァリー夫人』からトルストイの『アンナ・カレーニナ』にいたる一九世紀の偉大な中産市民小説を明確に規定する出来事であるだけでなく、小説を語りの無力から救った活力の元を提供したのである。不倫は、社会的限界という発想を小説というジャンルから解放したのである。「小説家にとって、その語りの始まりとなり、それに生気を吹き込むのは実際には結婚であることは少なく、それは不倫である」と、タナーは書いている。

このキャッシュの本を読んでいると、グリーンが愛読していたシビル・コノリーの『不安な墓地』に読み取れる次のような文章が、グリーンには情婦を初め多くの愛人やセックスの相手がいたが、その中で キャサリンへの愛だけは特異のもので、一度限りのものであったことが傍注として心に響いて来る——

私たちは一度しか愛さない。というのは、私たちは一度しか愛する身支度を完璧にされないからである。私たちは、他の時にもこれと同じように愛の状態にあるように自分には見えるかもしれない——そのように、九月初期の一日は、それは六時間短くても、六月の一日と同じくらいに暑いように見える。だから、私たちの人生のパターンは、あの最初の真の恋がいかにして形成されるかにかかっているのだ。

そのコノリーは「自分にとっても、現実の大人の最初の愛の情景に戻ることは、作品創造の持続にとっては、必須のように見える。他の愛人たちは、単なる自己迷妄にしかすぎない。——『不安な墓地』

と言っているのではないか。

すでに見た『情事の終わり』の梗概でも明らかなように、主人公のベンドリックスは愛人との情事を作品化しようとしている作家である。私はこの作品は作家ベンドリックスの作品創造の失策であると、かねてから理解してきた。私はその点に関してかつてこう書いたことがある。『情事の終わり』をこのように見た人は日本でも外国でもないのではないかと思っている——

物語の始点についてのベンドリックスの弁証はすでに紹介したが、雨の日にヘンリーの家でホールに立つセアラに再会したときに、つまり回想録を始めたばかりのときに、すでにベンドリックスは虚構と事実の決定的な差異をナイーヴにも告白している——

ホールの階段の下で立ち止まってこちらを振り向いた彼女の姿を、知らない人に僕はどう伝えればいいのだろうか。昔から僕は、たとえ自分で案出した作中人物であっても、行動によってしか人間を描くことができない。小説の登場人物の容貌などは、読者の自由な想像にまかせるべきで、出来合いの描写などすべきでない僕は信じてきた。そうした自分の技法が今僕を裏切ってしまったのだ。僕は、誰かほかの女性にセアラの代わりをさせたくない。僕はぜひ読者に、あの広い額、大胆さを秘めたあの唇、それと釣合のとれたあの頭の格好を見てほしいと思うのだ。

そのベンドリックスの技法は潜在意識に多く関わるいわば不可知論的なものであった——

買い物をしたり納税申告書を書いたり誰かと話をしたり、そんなことに専念しているときにも潜在意識の流れは相変わらず動き続け、問題を解決し、さきの計画を立てているのだ。不毛の状態で意気阻喪して机についていても、突然に、降って湧いたように言葉が出てくる。

完全に行きづまったと思われる情況が新しい展開を見せる。眠ったり買い物をしたり友だちと話をしたりしている間に、作業がそこまで進行しているのだ。

ところが、この自信に満ちた技法を携えてセアラに対峙したとき、ベンドリックスはその技法が無力であることを知らされるのである。それは何故か。〈事実〉というものは沈黙していて、無限に閉じられ、あるいは開かれているからである。「外的な世界の圧力が身動きできないほど僕のうえにのしかかっている。こうして自分自身の物語を書いても問題の性質にかわりはないし、困難はむしろいっそう大きい——さまざまな事実を頭のなかで作り上げる必要はないかわりに、事実があまりにも多すぎるのだ。あのぎっしり詰まった情景の中から——毎日の新聞、毎日の食事、バターシーメざして騒音をたてて走る車馬の流れ、パンを求めてテムズ河から飛んでくる鴉たち、一九三九年の初夏の陽ざしが照りつける公園で船を浮かべて遊ぶ子供たち——あの戦争前の明るい呪われた夏の情景の中から、人間の性格を掘りあてることが果たして可能だろうか」——この言葉は自己の技法の敗北とセアラという人間の不透過性の認知を早々と告げるものである。

すでに触れたように、ベンドリックスのこの回想録が「まっすぐな道を進もうとしないのは、僕が未知の領域に入り込んで迷っているためだ。地図もない。ここに書いていることのどれ一つとして間違いないことであるかどうかさえ分からなくなる」と困ったように記しているが、何故に「未知の領域に入り込んで迷っている」などと言うのだろうか。作家にとってこのような程度にまで〈未知の領域〉など存在しないはずである。もしあるとすれば、そのような領域については初めから書くようなことはしないだろうからである。にもかかわらず、ベンドリックスがそのように言うのは、これもさきほどのことと同じように、自己の技法に寄せる信頼によりかかって付き合ってきたセアラが、回想による追体験の中で不透過な存在として改めて迫ってきたからである。そのようなセアラの存在を捉えようとするために、ベンドリックスは、セアラの存在を神との関係という文脈において見直すという道を選んだのだが、それは一種のアナクロニズムを巻き込むことになり、別の意味でこれまた虚構的な技法に閉じこめられることになった。

そう見ると、『情事の終わり』という小説は小説創作の無効を訴えているのであろうか。この設問は作者グリーンに関わるものである。無効を最後に意識するのはグリーンではなくて、ベンドリックスである。そのベンドリックスの意識を包み込む作品を書いたのが、グリーンである。グリーン自身が『情事の終わり』という作品を独自の技法を駆使して作っているのである。この作品があとに残した問題は、芸術の持つ破壊的な力、ベンドリックスのエゴイズムと対照されるセアラの無我的態度へのヴィジョン、そして永遠の現在を生きた人間として映ったセアラとは逆に、アウグスティヌス的な過去・現在・未来のなかで過去(記憶、悔恨)と未来(不安)の両方に引き裂かれて現在が欠落しているという意識から解放されるこ

とのなかったベンドリックスの時間感覚の異相へ向けての変容(つまり未来に向けて無限に開かれた現在への、自由を保証するものとしての現在への変容)などが、グリーンのその後の小説作法にどのような影を落とすことになるかということである。そのように言えば、今後の作品でグリーンは神を主人公にしたプロットを描くというようにも受け取られるかもしれないが、それはそうではない。神のように自分の作品を作り、神のように自分の情事の相手を扱い、神のようにその情事の回顧録を企てようとした人物が、情事の相手を媒介にして忍び寄る神によって挫折し、死を願いながらもその神の實在に眼を向けていく物語を書くことは、カトリック作家グリーンにとってある意味での終着点であって、これから開かれるべき神をめぐる物語の出発点ではないのである。(山形和美著『グレアム・グリーンの世界』研究社出版一九九三年より)

あと残された重要な問題は、『情事の終わり』という作品に対する批判と、キャッシュのこの著作に対して向けられた厳しい批判についてである。

私は一九九三年の時点でイアン・グレガーの厳しい『情事の終わり』についての批判に気がついていた。彼の論点は、グリーンがこの作品で人生と芸術を十分に区別することができなかったという理解である。「グリーンは聖性の持つ根本的な神秘性を作品のテーマとしてのみならず、その表現様式を方向づけるものとしても捉えていたようにも思えるのである」と言うが、これはセアラの聖性とそれを巡る奇跡がテキスト次元で十分に表層化されていないということであろう。だが、すでに紹介したように、キャッシュはこの自作の意図をまさに人生と芸術の分離の作業としている。

その前にそれ以外の批判を簡単に見てみよう。キャッシュのこの作業は、種々の酷評を被った。キャッシュはそれらに対して防御態勢を整えた。キャッシュが苦勞して集めた資料から、キャサリンが労働党系の国会議員やIRAの役員や、カトリックの僧侶たちと性的関係を持ってきたことを事細やかに論証しても、そのようなことはみな先刻承知していることで、キャッシュの作業はほとんど無駄である(イアン・ハミルトンの批判)やキャッシュの筆法は支離滅裂であるとも言う、もう一人の批評家はキャッシュの唱える人生と芸術の分離に関して文句を付けている(デイヴィッド・セクストン)。

これは、トニー・タナーに準じて不倫が文学の生成原理であるというキャッシュの主張に反論するものである。これは、すべての作家は不貞を働き、不貞を働く人は必然的に小説家にならざるをえないという論理にキャッシュの原理をねじ曲げた屁理屈である。最後に、オリヴァー・ウォールストンの批判である。彼はキャサリンの息子だからその批判は無視しても良いだろうが、『情事の終わり』という作品は筆法が拙く、自惚れが強く、不正確であり、些末であり、みだらであり、なかならず、ごてごてと飾りたてている。こういった批判は『情事の終わり』のセアラを自分の母親に重ねて読んでいるからだと言っ

て差し支えなからう。ウイルソンという人がキャッシュのこの著作を”succinct masterpiece”「簡明な傑作」と言って、これから売り出されるこの本の版本はみな「簡明な傑作」として銘打たれるだろうと言う。これでキャッシュ攻撃に幕が下ろされた。だが、キャッシュは攻撃に出たハーバート嬢の馬鹿さ加減に対して「彼女は自分が何を語っているか少しも分かっていない。彼女はグレアム・グリーンを語る知的な資格がない」とまで、揶揄っている。

これでこの小論としては必要にして十分だろう。私もキャッシュの筆法を散漫だと思ってきたが、読み終わると、不思議にもグリーンとキャサリンの情事の真の中核的イメージが心内に醸し出されてくるのをどうしようもなく受け入れざるをえなくなってきた。

注1. William Cash, *The Third Woman: The Secret Passion That Inspired The End of the Affair*, 2000. ウィリアム・キャッシュ著、山形和美訳『グレアム・グリーンと第三の女―「情事の終わり」を生んだ秘められた情欲』彩流社、2010